

Newsletter

JAPAN SOCIETY OF EDUCATIONAL INFORMATION

日本教育情報学会

NO.106 2004.2.20

〒158-8630 東京都世田谷区等々力 6-39-15 (学) 産業能率大学内 日本教育情報学会 運営本部事務局

Tel: 03-3704-9168 Fax: 03-3704-9246

E-mail: JSEI@hj.sanno.ac.jp <http://www.soc.nii.ac.jp/jsei>

日本教育情報学会第20回年会 ~ 発表申込み受付中 ~

8月18・19日国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて開催
大会スローガン『教育情報，20年の歩み』

本年度の第20回年会は，8月に国立オリンピック記念青少年総合センターを会場に開催いたします。本日，大会の概要と研究発表の応募に関する内容をお知らせいたします。

下記の要項をご熟読の上，期限内に手続きしていただきますようお願いいたします。多数のご参加とご発表をお待ちしております。

期 日 2004年8月18日(水)・19日(木)

会 場 国立オリンピック記念青少年総合センター

所在地 〒151-0062 東京都渋谷区代々木神園町3番1号(03-3467-7201)

交通 小田急線 参宮前駅下車 徒歩7分

地下鉄千代田線 代々木公園駅下車 徒歩10分

<http://www.nyc.go.jp/users/d7.html>

事務局 十文字学園女子大学 社会情報学部 井口研究室内

日本教育情報学会第20回年会実行委員会

研究会開催

21世紀のリテラシーを考える

2004年5月2日(日) 14:30 ~ ぱ・る・るプラザ京都(京都駅側)

参加費：無料 懇親会参加費：5,000円

詳しくは5ページ参照

日 程 (時間は予定)

8月18日(水) 1日目		8月19日(木) 2日目	
9:30	受付開始	9:30	受付開始
10:00~12:00	課題研究発表 一般研究発表	10:00~12:00	課題研究発表 一般研究発表
12:00~13:00	昼食・休憩 (理事会・評議員会)	12:00~13:00	昼食・休憩
13:00~14:00	総会・学会賞表彰式	13:00~17:00	課題研究発表 一般研究発表
14:00~17:00	記念講演 パネル討論		
18:00~	懇親会		

(1) 記念講演

基調講演 「教育情報の20年の歩み」 会長 木田 宏

鼎談 会長 木田 宏, 理事 有園 格(静岡文化芸術大学), 理事 後藤忠彦(岐阜女子大学)

[趣旨] 本学会が設立されて19年(来年満20年)が経過しました。今大会のスローガンに『教育情報, 20年の歩み』を掲げました。戦後の文部行政に深く関わられた木田会長に戦後の教育史を踏まえて, 本学会が求めてきた「教育情報の枠組み」について熱く語っていただきます。それを受け, 「情報の文化」を築き上げようとしてこられた深谷哲先生の遺志を汲んで, 有園先生と後藤先生に加わっていただき鼎談をしていただきます。三名の先生方から思いがけない教育史の側面や裏面からの四方山話を伺えること間違いなしです。どうぞ奮ってご参加ください。

(2) パネル討論

テーマ 「21世紀のリテラシー」

基 調 提 案: 堀口秀嗣(常磐大学)

コーディネータ: 本郷 健(川村学園女子大学)

パネリスト: 研究者, 現場の代表者等 3名を予定

[趣旨] 基礎学力の低下は, 各種調査で明らかといわれますが, その実態はどのようなのでしょうか。基礎学力は3R'sなのか, それ以外の能力は身に付いてはいないのでしょうか。ものづくりを通して, 分析から統合へ, その過程で養成される能力は何なのでしょうか。生きる力(総合的な学習の時間で要請される)と, 基礎学力は相克するものか, 補完しあうものなのでしょうか。これらの疑問について, 各方面の研究者, 現場の実践者に議論していただきます。

(3) 課題研究テーマ

課題1 インタラクティブな学習環境の開発 コーディネータ 加藤直樹(岐阜大学)

今やデジタルコンテンツは有り余るほど開発されている。しかし, 学習材としての利用価値はあるのか, 授業で活用できるのか。インタラクティブな学習環境の構築, 教材の共有化, 校内ネットワークなどに関する研究はどこまで進んでいるのか。これらの取り組みに対する先進的な研究を提案していただく。

課題2 e-Learning コーディネータ 安達一寿(十文字学園女子大学)

ブロードバンド時代を迎えて, 動画コンテンツが豊富に提供されるようになった。そのような豊富な教育用コンテンツを利用したブロードバンド時代の学習環境や, 学習情報管理システムなどに関する研究はどこまで進んでいるのか。今後の発展を見通しながら議論していただく。

課題3 教師教育と生涯教育 コーディネータ 宮田 仁(滋賀大学)

公立学校にも外部評価システムや, 運営委員会による学校経営参加など様々な教育行政の改革

が提案されている。その本質は教員の資質向上，指導力向上が問われているのではない。教員研修や教員養成の問題から社会教育，生涯教育，NPOなどに関する研究を取り上げ幅広く議論していただく。

課題4 教育情報の流通 コーディネータ 村瀬康一郎（岐阜大学）

学校現場に役立つ情報，あるいは，教員が求める情報とは何か。教材データベースは学校における「知」を共有できるのか。どのようなシステムを構築すれば教育情報が学校まで流通するのだろうか。学校図書館は学習センターや教材センターの機能を生かしつつ教育情報の流通に寄与できるのだろうか。昭和60年代に各地で構築された教育用データベースを振り返りつつ，これからの教育情報の流通に関して議論していただく。

課題5 教科「情報」のあるべき姿 コーディネータ 中村祐治（横浜国立大学）

平成15年度からスタートした普通教科「情報」は様々な問題を抱えながら実施されている。教材やカリキュラムの問題，情報A・B・Cの履修状況などに関する研究を報告していただいて，これからの10年間の教科「情報」のあり方を議論していただく。

課題6 教育と著作権 コーディネータ 坂井知志（常磐大学）

平成14年7月の「知的財産戦略大綱」を受けて，著作権分科会は平成15年1月に報告書を提出し，6月に「著作権法の一部を改正する法律」が制定された。この法律は平成16年1月1日から施行されたが，はたして学校現場では授業や学習がし易くなったのだろうか。一部改正された著作権と教育の関係から議論を深めていただく。

（4）一般研究発表

- ・発表内容は「教育情報に関する研究」であれば，特に内容は問いません。「教育情報」は，大きくみて「教育に関する情報」と「情報に関する教育」が含まれています。
- ・想定される発表セッション（キーワード）は次の通りです。（五十音順）

インターネット，遠隔教育，遠隔教育システム，学習ソフトウェア開発（教育用ソフトウェア），学習情報管理システム，学習評価，教育システム，共同学習（遠隔協働学習），交流学习，授業分析，児童による情報作成，生涯学習，情報教育（カリキュラム論を含む），情報教育システム，情報教材開発（コンテンツを含む），情報検索，情報処理教育，データベース，動画教材の開発，ネットワーク（活用，管理，LAN），プレゼンテーション，ホームページ，マルチメディア（活用，開発等）

（5）インフォーマルミーティング

今回，年会実行委員会が予定しているパネル討論や課題研究以外に，ミーティングを考えているグループがありましたら，会場を提供いたします。年会実行委員会にお問合せください。（開催を保証するものではありません）

ex. 企業と学校現場との協同による「教育産業から見て，教師が欲しがらる情報とは」

（6）研究発表申込み方法

申込締切 2004年 5月15日（土）

申込方法 課題研究は「課題研究発表申込書」（申込用紙左側），一般研究は「一般研究発表申込書」（申込用紙右側）に必要事項をご記入の上，年会実行委員会事務局へ郵送してください。

課題研究に関する注意事項

- ・課題研究は前記「課題研究テーマ」から選びそのテーマに合った研究発表題目をつけてください。
- ・課題研究発表は年会実行委員会で調整し，各テーマごとに担当コーディネータが検討し，審査します。その結果，発表否となる場合もあることをあらかじめご了承ください。なお，課題研究として発表できない場合には，一般研究を別に申し込んでいても課題研究分を一般研究発表として発表していただくことができる場合もあります。

- ・第1発表者として課題研究発表は、1人につき1件のみとします。ただし、年会実行委員会から特に依頼された課題研究発表についてはこの限りではありません。

一般研究に関する注意事項

- ・第1発表者としての一般研究発表は、1人につき1件のみとします。
- ・一般研究発表の発表者は、発表の時点で会員である必要があります。非会員の方は、事前に学会入会の手続きをしてください。学会入会申込書は年会事務局にご請求ください。

発表申込書の書き方について

- ・講演者とは、研究発表会場で口頭発表する会員です。
- ・共同研究者は何人でもかまいません。
- ・概要はなるべく詳細に書いてください。
- ・キーワードとして、前記発表セッション名の中から数語を含めて10語以内を選んでください。
- ・会場で使用できる機器は、プロジェクタ、書画カメラ、OHPです。パソコンは会場で用意できませんので、使用する場合には持参する機器の欄に記入してください。
- ・執筆要項などの送付先は、発表者への連絡時期である5月下旬を想定して、自宅または勤務先にしてください。

(7) 発表者への連絡

発表者には、5月下旬に発表の可否を連絡します。

発表を可とされた申込者に対しては、論文の執筆要項をお送りします。

論文の原稿枚数は2枚または4枚とします。原稿は「年会論文集」の版下の形で、ワープロ出力したものを提出していただきます。

(8) 参加費について

- ・会員事前申込締切日まで
参加費 3,000円 資料代 3,000円 懇親会費 5,000円(予定)
 - ・会員(当日)・非会員
参加費 4,000円 資料代 3,000円 懇親会費 5,000円(予定)
- 参加申込みは、後日送付する「年会参加申込書(兼)参加費振込用紙」(郵便振替)をご利用ください。

(9) 宿泊について

- ・宿泊に関しましては、各自で手配いただきますよう、お願い申し上げます。

(10) これからのスケジュール(予定)

発表申込締切	2004年5月15日(土)
発表決定通知	2004年5月31日(月)
論文提出締切	2004年7月15日(木)
参加申込締切	2004年8月10日(火)(=参加費支払締切)

発表申込書送付先・問い合わせ先

送付先：〒352-8510 埼玉県新座市菅沢2-1-28
 十文字学園女子大学 社会情報学部 井口研究室内
 日本教育情報学会第20回年会実行委員会
 Tel 048-477-0555(代表) Fax 048-478-9367
 メールによる問合せ：井口磯夫 (i-iguchi@jumonji-u.ac.jp)

21世紀のリテラシーを考える

日本教育情報学会第20回年会(8月18日・19日 国立オリンピック記念青少年総合センター)の大会スローガン『教育情報, 20年の歩み』に鑑み, 実施予定のパネル討論に関連する研究会を京都にて開催します。皆さまお誘いあわせの上, 奮ってご参加ください。

日時: 2004年5月2日(日) 14:30~17:00 シンポジウム

17:30~19:30 懇親会

会場: ぱ・る・るプラザ京都 6階 会議室6(シンポジウム)
5階 会議室2(懇親会)

(JR京都駅 烏丸中央口出て右の建物)

〒600-8216 京都市下京区東洞院通七条下ル東塩小路町676番13 TEL: 075-352-7444(代)

案内図: <http://www.mielparque.or.jp/kyt/kyt01.html>

参加費: 無料 懇親会参加費: 5,000円(当日会場でお支払いください)

*** 基調講演と総括 ***

「21世紀のリテラシーを考える」 堀口秀嗣(常磐大学教授)

*** パネルディスカッション ***

「21世紀が始まって感じた教育の今日的課題 - リテラシーを考える -」

コーディネータ: 林 徳治(山口大学教授)

話題提供者: 義務教育で必要なリテラシーを考える 井上史子(山口市立宮野中学校教諭)

大学生に必要なリテラシーを考える 沖 裕貴(山口大学教授)

教師に必要なリテラシーを考える 北川敬一(大阪府立牧野高校教頭)

社会で求められるテラシーとは 泉 廣治(兵庫県教育委員会指導主事)

参加申込み方法

E-mail または FAX に次の事項をご記入になり「リテラシーを考える研究会事務局 黒川マキ」までお送りください。様式は問いません。

〔件名〕 21世紀のリテラシーを考える研究会 申込み

〔記入事項〕 氏名(ふりがな) 所属 E-mailアドレス又はFAX番号

電話番号 懇親会参加の有無

会員種別((1)日本教育情報学会会員 (2)情報教養研究会会員 (3)一般)

ご意見(広く募集します)

送付先

電子メール: makkie@oak.ocn.ne.jp

FAX: 083-933-5310

受講票

受講票をメール又はFAXで返信致します。当日, 受講票をご持参ください。

申込み締切

2004年4月24日(土)

席数に限りがありますのでお早めにお申し込みお願いします。

懇親会参加費は, 当日会場でお支払いください。

リテラシー (Literacy) の解釈について考える

(堀口秀嗣 / 常磐大学教授の文より引用)

21世紀のリテラシーはアメリカでずいぶん取り上げられている。インターネットで得られる情報の範囲でも、従来のリテラシーの概念を変えなければならないほど基本的な能力の枠組みを検討しているようである。また、No Child Left Behind (NCLB) という法律を作って、落ちこぼれをつくらぬ教育を目指し、そのための ICT 活用、そして 2020VISIONS のような構想、さらにそれを絵にして子どもから大人まで広く意見を徴しようとするアプローチに日本も負けていられない気持ちになる。<http://www.nationaledtechplan.org/resources.asp>

リテラシーに関する意見ですが、正直言って、何でも * * リテラシーと書いてしまうことには抵抗がある。illiteracy (リテラシーが無い) がかつて無学、文盲 (今は差別用語なので使いませんが) と訳されたように、リテラシーとはそれがないと社会的な人間としてまっとうに生きていけないほど基本的な資質であった (命が無くなるまで生きていけないことではないけれど、社会に受け入れられないほど、基本的な資質)。

だから、リテラシーは英語圏では長いこと「読み、書き、計算」が社会に生きる者として基本的に必要であり、それは教育によって後天的に獲得させないと身につかない力でもあったと思う。

江戸時代の多くの農民は、話す・聞くはできても、読む・書くはできなかった。話す・聞くはそういう社会に生きていけば、自然と身についた (身につけざるを得ない) 力であった。その力は、教育されることによってはじめて身についたものである。逆にそうすることで、ごく一部の領主や武士が多数の農民を支配できたとも言えるのだが……。ところが、社会が複雑化し、さらに今後高度情報通信社会になると「読み、書き、計算」だけでは足りなくなり、さらに社会が複雑化していくと、求められる基本的な資質が変わっていくことが予想される。そこで、アメリカではデジタルエイジリテラシーとして 2001 年にリテラシーの概念を拡張した。従来のリテラシーを Basic Literacy として、その他に Scientific and Technological Literacy, Visual and Information Literacy, Cultural Literacy and Global Awareness が必要であり、それらを合わせて Digital Age Literacy になった。このほかに、skill という概念も ability, capability という能力概念もある。でも、すべて literacy の上に乗る能力である。

さて、アメリカでは 2001 年に、21st Century Skills という定義もされた。それは 4 つの内容で、

- (1) Digital Age Literacy デジタル時代のリテラシー
- (2) Inventive Thinking 発見的・発明的 (独創的) な思考・発想
- (3) Effective Communication 効果的なコミュニケーション
- (4) High Productivity 高い生産性

である。